第 3 章　新市建設の基本方針

1. 新市の将来像と基本哲学

1-1　新市の将来像

『元気な大交流都市』

－公園都市・共生都市・快適産業都市へ－

新市は、木曽川の恵みを受けた豊かな自然にあふれ、名古屋から 30km 圏内という広域的な交通条件のなかで発展してきた地域です。学校や集会施設、道路網等の基礎的な社会資本の整備充実は概ね終了し、現在は、都市基盤整備の一層の充実に加え、生涯学習の推進や福祉医療サービスの充実など、成熟した都市への転換期に入りつつあります。その一方で、未来に向け、個性あるまちづくりの原動力となる産業面や基盤整備への投資も、積極的に進められてきています。

太古、木曽川と伊勢湾の恵みを求めて人々はこの地に集まりました。中世には東西の覇権が何度もぶつかり合いました。この地を支配することが天下を治めることにつながったからです。近世、川と街道は、人とモノと文化を運び、やがて、飛行機を造る人々が集まり、新しいまちができました。

そして現代から未来へ。各務原地区では、航空宇宙・自動車など輸送機器関連産業を中心とした工業集積力に加え、近年では、IT ・ VR 技術・ロボット技術・バイオテクノロジーなどの先端産業が積極的に創出され、未来に向けて、世界的規模の技術交流が期待されています。また、川島地区では、年間 300 万人以上が訪れる「河川環境楽園」が整備され、サービス産業の振興と雇用の拡大とともに、重要な交流拠点として期待されています。さらに、東海北陸自動車道と東海環状自動車道とのジョイント、国道 21 号坂祝バイパスの開通は、新しいスタイルの人の交流と産業の進化を予感させます。

過去から未来へと、この地域の発展のキーワードは『交流』なのです。新しいまちづくりには、歴史と現状と未来の展望を踏まえた“交流拠点の整備”が不可欠です。人々が集まり、生活し、交流する中で生まれる調和が、やがて、“大交流都市”へと進化していきます。ここに新市誕生の意義があります。

そこで、まちづくりに関わる動向や課題を踏まえつつ、圏域の特性を活かし、新市がめざすべき将来像を次のように定めました。

『元気な大交流都市』　－公園都市・共生都市・快適産業都市へ－

「元気な大交流都市」とは、「豊かな自然と都市が調和し、すべての人々が生き生きと活動し、産業が成長を続け、交流がもたらす活気にあふれた元気で美しいまちづくり」をめざすもので、以下の顔を持つ都市でもあります。

【公園都市】

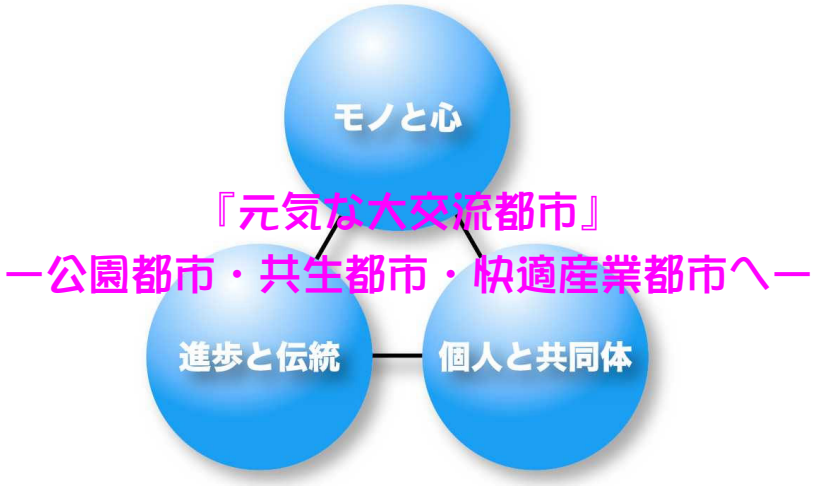
自然と都市機能を調和させることにより、生活の場・仕事の場である都市に、自由時間を楽しむ場や“癒し空間”を提供する、**日本初のパークシティをめざします**。

【共生都市】
　世代間、障害のある人とない人、市街地と田園地帯、森や川と都市、歴史と未来、伝統と先端技術、モノと文化・芸術など、あらゆるものが共生する豊かな都市をめざします。
【快適産業都市】
　快適とは生活を、産業は活力を意味します。市民が快適に生活できるとともに、新たな情報・技術や英知の結集を活かした付加価値の創造により、地域産業が発展しつつ、活力ある新規産業が生まれる都市をめざします。

1-2　新市の基本哲学

将来像実現のために、新市建設の基本哲学に、三つのバランスを織り込みました。

「モノと心のバランス」「進歩と伝統のバランス」「個人と共同体とのバランス」

【モノと心のバランスとは**】**
　戦後、モノへのあくなき追求という「物質主義」に対し、モノがいくら増えても心は満たされないことへの疑問や反省から、お金やモノだけでなく心の豊かさを実感することへと変化してきています。とかく、ヒトとヒトが無機質な関係となりがちな時代だからこそ、心のふれあいが重要視されます。
【進歩と伝統のバランスとは**】**
　日本での「古きこと＝（イコール）悪い」という風潮に対し、欧米では、「古い」には、良い、親しみがある、守るべき、という意味が与えられています。地域固有の歴史、文化を守り、そして学び、古きものと新しいものとの調和を図ります。
　一方、既存産業の振興とともに、産業の高度化や新産業の創設を図ることも重要です。
【個人と共同体とのバランスとは**】**
　現代社会においては、行き過ぎた「個人主義」により伝統的な共同体が崩壊の危機に瀕しています。個人・家庭と地域社会の関係、あるいは市民と都市（共同体）との関係、個人とそれが属する集団とで、協働し、相互に協調し合う社会が望まれています。

この都市経営上の基本哲学である三つのバランスを堅持・再生することで、「元気な大交流都市」の実現をめざします。